ゼミナール
Seminar
ゼミ探訪学びの時間

グローバル・コミュニケーション学部
吉田 優子ゼミ
【グローバル・コミュニケーション学部教授】

何よりも重視しているのが 独自の視点と的確な分析に基づく 論理的な思考能力の鍛錬

英語と日本語を中心に言語の普遍性・多様性と社会との関わりを探究する

吉田優子教授の主な専門分野は「理論言語学－音韻論」。音の体系・構造の規則性などを見極め、言語音の普遍性と多様性の研究をしている。大学の英文学科で学んでいた時、習得した外国語が例外なく本人の母語のアクセントになることに興味を持った。「例えば、日本人の学生に英文を読ませると、その出身地の方言の影響が顕著に生じます。関西弁、東北弁のイントネーションといった具合です。文法などは学習すれば、比較的母語に近い形で使えますが、一般的に発音の習得は困難です。様々な言語のいろいろな言語音に興味を持ち、音節や韻脚など、理論上の概念の心的内在性に強く興味を持ちました」。また、当時所属していたシェイクスピア研究のゼミでは、時の流れとともに言語が大きく変わっていくことを実感し、母音体系の変化にも着目。その後、ロンドン大学で約８年間、院生として、さらには教鞭を執る中で耳にした英語のバラエティと社会の深い関係に関心を持ったことも、今日の研究につながっている。

「イギリスのバラエティはピラミッドを構築しています。王室を頂点にして社会の各階層の構成を縦軸に、横軸には地域差が現され、労働階級においては大きな地域差、すなわち発音の驚くほどの多様性が見られます」

吉田ゼミの主軸となるテーマは「言語の普遍性」と「アクセントと社会の関係」。音声記号などの基礎知識を学んだ後、英語と日本語を中心に言語の特徴を考察していく。吉田ゼミは英語によるコミュニケーションが鉄則であり、日々の学びは卓越した英語力の練磨にも大きく役立っている。「何よりも重視しているのが論理的な思考能力の養成です。これには英語を使う方がより効果的です。ゼミでは学生が対応できるレベルの課題を提示し、各自が自分なりの結論に至るまで主体的に考究させます。これを繰り返すことによって発想力、推理力、調査力に裏付けられた論理的思考力が確実に培われていきます」。この能力を徹底的に鍛え上げることができれば、将来、どのような分野に挑んでも、目前の課題を確実にクリアでき、成果をあげることのできる人材になれると、吉田教授は確信を持って語る。

プレゼンテーションによって卒業研究の考察を深める

当日の吉田ゼミは４年次生の菅勇輝さんのプレゼンテーションで始まった。ゼミ生たちが見つめる画面の中央に「?」が大きく映し出され、これに重ねて「27」という数字が提示される。ここで菅さんが全員に「これは何を意味する数字か」と流暢な英語で問いかける。答えはアジア 30 カ国中における日本の英語力の順位である。このようなプロローグからアジア各国の英語の特徴、多様性、教育制度、現状での課題や今後の展望などを考察していく。関心を巧みに呼び寄せる実に手際の良いプレゼンテーションである。「1 年次生の時から効果的なプレゼンテーションの手法を学ばせています。1 年間の留学中に外国人の学生と討議することによって、さらに上達します。現在、４年次のゼミ生は卒業研究のテーマが確定しており、これを詰めている段階です。その概要を各自が全員の前で発表し、質疑応答を繰り返すことによって論考が深まっていきます」

続けて吉田教授が学生の前に立ち、映像を用いながらゼミ生に語りかける。映し出されたのは大阪府を中心にした関西弁の詳細な区分地図である。大阪府出身者が８人いることから、府内のバラエティを検討するため、学生自身の出身地と動詞の活用形、例えば共通語の「行かない」に当たる「行けへん」「行かへん」「行きやへん」などの調査を教室で行い、分布をマップに表したものである。最初は同じ大阪方言で何も違わないと言い張っていた学生たちには目から鱗の体験となった。身近な方言の例から気づきが得られ、これがゼミ生に不可欠な分析力の養成に役立つのだという。さらにある発話を関西方言の例として表示。発言している人物の年齢などを推理させる。「これは関西の年輩女性のスピーチで、ゼミ生にも推定できます。先週までニューヨークにおけるアクセントと社会の関係について学術論文を基に検討していたのですが、これを活かしたかたちで、今度は主体的に思考させ、そこから専門的な探究を行っていきます。地理的・社会的な要因もありますが、年齢層による違い、つまり時が経つことによって言語が変化することも非常に重要な素因です」

言語音の理解が対話力を高め卓越した国際人を育む

吉田ゼミに所属しているのは３年次生 11 人と４年次生 11 人。取材時のゼミは４年次生が対象で、今年は女性が多数を占めているが、男女の比率は毎年異なる。中国・南京市出身の盛詩珺（せいしくん）さんは大阪女学院高校を経て本学に入学した。留学先には以前から憧れていたイギリスを選び、サセックス大学で学んだ。その時、各地の方言の違いを実感し、これを探究するために吉田ゼミを選んだという。「例えば、ロンドンの労働者階級で話されるコックニーの発音を研究することによって、イギリスの階級制度を深く知ることができます。このようなアクセントと社会の関係についての視点や考察が真の英語力やコミュニケーション能力を高めるのに不可欠だということを学びました」。卒業研究では中国語のトーンアクセントをテーマに取り上げ、日本語のピッチアクセントとの比較なども交えながら考察する予定である。吉田教授については「私が理想とする『強くて優しい女性』です。就職活動で『どんな人になりたいですか』と聞かれた時も、先生のお名前を挙げました」という言葉が返ってきた。

小澤かおりさんはニュージーランドの首都ウェリントンにあるビクトリア大学に留学後、本ゼミを受講した。「発音の違いなどについて深く学びたかったのでこのゼミを選択しました。また、先生としても、人間的にも、吉田先生が魅力的だったことも理由です。以前から関心のあった関西の方言についての知識が増え、英語の発音についても具体的な口の動かし方から習得でき、非常に役立っています」。卒業研究のテーマは出身地の岐阜県と関西の方言のアクセントやイントネーションの比較論を想定している。

上田実佳さんはカナダのゲルフ大学留学時に、英語母語話者とそれ以外の人々はもとより、英語母語話者の中でも発音やアクセントなどに違いがあることに気づく。国籍や出身地を超えて誰とでも円滑な意思疎通ができるようになるためには、それぞれの差異を的確に学ばなければならないと考え、吉田ゼミを選んだ。「音韻論は想像していた以上に専門的な分野ですが、吉田先生の的確な教授によって着実に論理的な思考能力や分析力を高めることができます」。卒業研究では日本人が世界へ通じる英語力を養うための要点を提示し、その具体的な教育方法を論考したいと考えている。